

統合事業に關する
歡喜と希望

法學博士 山田三良

の教學上 三大祕法抄綱要

統

日蓮門下發展史記

三 上 義 徹

轉凡見入正智

辯護士 柴崎守雄

宗教撰擇と人格の修養

日蓮門下 祝辭

成立 發表會

宗教局長 柴田駒三郎

▲思想の界の教書▲

◎法華經講義

本多日生師講義

洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵稅十六錢を以て提供す

◎如來壽量品講演輯

軍事教育會發行

壽量品の大意を知らざれば一代佛の中心を知らざるもの也佛敎の活力眞價は壽量品にあり讀み大に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ

◎精神の修養——思想の調整

陸軍少將 小原正恒著

内容豊富立論堂々近代の快文字なり

定價金卅五錢 郵稅金四錢 上下二卷 郵稅共四十八錢

◎軍神加藤清正公

清正公の人格及宗教的信仰を知らんとするものは先づ本書を讀まざる可らず施本用に尤も適せり

金十部 郵稅共十部 郵稅共十部 郵稅共十部

◎立正安國論略解

マスター、オグ、アツタ柴田一能著

第一版已に賣切れ再版出來△日蓮主義と國家との甚深なる交渉を知らんするものは須らく本書を讀むべし珍美本にして百十頁の内容あり

金十部 郵稅二錢

◎縮法華經並開結

菊判半截携帶に尤も便なり

紙製二十錢 郵稅四錢 布製天金四十五錢 郵稅六錢

◎橘香集

日蓮上人の遺文拔萃にして研究順序の指南あり

郵稅一拾錢

◎勤行作法

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして通りなきを要す本書は日蓮門下を示したる教典也

郵稅一拾錢 郵稅二錢

東京市神田區榮土代町二丁目一番地 三尊會發行

販賣所 東京市小石川白山前町七番地 三上義徹

天晴會發行

天晴會講演演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢
本文約八百頁
總クローヌ上製美本日蓮上人御尊像及講演會寫真入り
送内 地拾貳錢
料朝鮮滿洲臺灣四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし

▲讀しむべし 本書を讀しむべし 本書は人格完成の好資料也

内容 ■ 姉崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。箕作法學博士。臨田大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。石橋中將。笹川文學士。實博。山根僧正。

發賣所 東京市神田區 美土代町二、一 三 上 秀 義 徹 舍
東京市小石川區 白山前町十七 三 上 義 徹 舍
發賣所 東京市小石川區 白山前町十七 三 上 義 徹 舍

凡見轉て正智にれ入

▲現在の我は小なるが如く見ゆるも而らず、其は向上の質を有すれば也、即ち之を磨けばいよゝ大なる我を開顯するを得、信仰の徹底即ち茲に存す、然れども人に我儘あり、自己の意の如くならざるを憤りて癩癩を起すものあり、漫りに他の人格の良否を判して餘計な膽を煎るものあり、共に甚だ愚也、人の態度見て吾が態度直せとは味あり、寧ろ退いて自己の人格を内觀し、自己生存の保障を確かにすること大事にあらずや、自己立脚の動搖を省みずして他の心配は無益也、先づ正直に自己を確實にせよ。

▲今の世には正直の人尠し、何かと問題を据らへて措いて、其事業稍や成果の見るべきものがあれば、巧みに横合より茶々を入れ、その隙に乗じて成績の攫濫を爲すあり、さても惑むべき貪煩惱の奴なる哉。

▲人は公正なる識見を有ちたきもの也、之れ人の人たる第一資格なり、是れなくんば一切の判断を謬り、總て逆觀的に黑白を混同するに至る、斯くては自他の存在及活動を傷ふ、所謂共倒れとなりて何等得る所なき也、賢者は然らず、今の宗教界の不振は正しく此義に依るにあらざるなきか。

▲個人は個人なり、事業は事業なり、個人が氣に食はぬと云つて事業の進捗を

妨ぐるは不可也、個人と事業とを混同するは低能者なり、事業の性質及目的を理解せば何人の企てなりとも進んで之に賛するは丈夫の態度なりとす、愚痴の煩惱熾なればいよゝ小人と成る、小人は人間の墮落生活なり、求めて墮落するはあまりに智恵のなき仕業ならずや。

▲智恵のある人もなき人も、男は男らしくなければ男にあらず、女は女らしくなければ女にあらず、人間の價値は茲にあり、日蓮主義は價値ある人間を作る力也、小人を轉じて徹底せる丈夫の生活に進展せしむる也、信仰はこの力を鍛え上げる運動なり、日蓮主義者は潔よく身を艱苦の裡に投ずるの活氣なかる可らず、總て勇往邁進なるを要す、小理窟と泣言は大禁物なり、然るに何ぞ、日蓮主義者にして小理窟や泣言を云ふは奇怪千萬なり、それほど臆病なれば潔よく從來の看板を撤し、立派に非日蓮主義者を名乗れ、須らく男らしくせよ、然らずんば鐵鎚は天の一角より下りて頭破作七分ならんのみ。

▲日蓮の統合事業は六百年の昔に復古するにあらず、日蓮上人の大精神に復歸するを云ふ也、今に於て統合に關する凡俗の意見取るに足らず、一大日蓮の信仰に在るものは小理窟無用なり、熱烈なる信仰を以て努力奮闘せよ。

日蓮門下統合

成立
發表會

祝辭

宗教局長 柴田駒三郎

今日は一木文部大臣が御都合が就く折てありましたならば、御出席になる筈でありましたが、據なく差支の爲に出席になることが出来ませんでした、私が代理として此方に出席致しました譯であります、一言今日の此盛會に就きまして、祝賀の意を述べたいと思ふのでございます。

今日は日蓮御門下の七教團が、此の統合の規約を結ばれましたに就きまして、其の統合の成立を天下に發表さるゝに至りましたのは、御宗門の爲には勿論、之れを大に致しましては世間一般の爲に非常に慶賀すべきことであらうかと考へるのであります、宗門には何れの宗門に於きましても、いろゝ分派の生ずる譯で

ありまするが、是れは各宗教の歴史に於て、いろゝ避くべからざる原因あつて發生することでもありませう、又教義上に就いていろゝ差異がある爲に起つて居ることもありませう、又時勢の結果として往々避くべからざる原因があつて分派が生ずると云ふこともありませうが、併し此の長き歴史の間に於きましては分派が相生じて、段々是れには感情も伴つて、分派した各派を融合せしむることを段々困難ならしむる様なこととなることがあるのではあらうかと思ふのである、此の日蓮の御宗門の如きも、或は日蓮聖人のお弟子方の間に於て、直々のお弟子なり、或は其の後のお弟子方の間に於て分派の區別が段々生じて來たと云ふ様なこ

ともあらう、て恐らく感情と云ふことは餘り大しては無いのでありませうが、併し人間萬事免るべからざることは感情であるから、長い間には又其の感情も伴ひ各派の間に親しく融和すべからざる様な争ひも随分あつて、同じく此の日蓮聖人を宗祖として居られるにも拘らず、他の宗門の者に對すると同様に、此の各派の間に於いて争ひもあつた時代もあつたと云ふ風に承つて居ります、或は又尙ほ激しい様な場合にあつては他の宗門に對してよりも融和が困難であつたと云ふことも承つて居るのであります、併ながら斯う云ふ如く分派の生ずるのは時勢の上から随分止むを得ず生ずることもありませう、又いろ／＼先程申述べました様なこともありませうが、一旦此の時勢が變つて参りますれば、随つて又其の變つた時勢に適應する様にならなければならぬと云ふことは、寧ろ當然のことである其處で申上げる迄もありませんが、此の時勢の進歩は維新以前に於きましても、或は自然の進歩と云ふものはあつたてありませうが、是れは餘り認める程のこと

もなし、随分長い間、同じ様な状態であつたのであります、御承知の通り明治維新以來、時勢の進歩と云ふものは駭々として止まらず、非常な勃興を致しました譯でございます、随つて物質上の進歩と云ふものは非常でありましたが、物質上の進歩だけで、思想界の進歩と云ふことが無くては、今日此の社會と云ふものが立行くものではない、大に物質的の進歩が極つても、只其の物質物の進歩の爲には、又弊害も來たして、遂には其の弊に堪えざるに至るであらうと思ふのであります、それで今日に於きましては、思想界に於きましても、何とかしなければならぬと云ふ種々の要求も現はれて参りました、只今此の日蓮宗の皆様が、段々宗門の状態に就いていろ／＼御考慮を回らされるに至りましたのも、矢張り此思想界の要求が一の原因を……大なる原因をなして居るのであらうと思ふのであります、其處で日蓮宗に於きましては、從來の如き状態に在つては、到底是れに満足することは出来ない、是れでは社會の進歩と伴はない、相争うて居るべきもので

ないと云ふ所から、漸次之れを融合して、各派の統合を必要とすることに至りまして、實に是れは一大覺醒の時期に到達したのでありませう、そして御宗内の有力なる僧俗兩方の方々が非常な努力奮發を致され、さうして此の統合のことをいろ／＼御心配になり、遂に今日宗門に於ては未曾有と云ふて宜い所の、此の統合成立發表會を今日開くことに至りましたと云ふことは眞に是れは時勢の要求に依つてあるとは云へ、併ながら、今申した僧俗兩方の主なる方々の奮勵努力せられた結果である、又此處に來會して居るに於ける皆様が、滿腔の熱心を以て之れを翼賛された結果である、眞に是れは一の奇蹟であると云つても決して不可ではないと思ふのでございます。

昔し日本國內に於きまして、宗教と云へば單に殆んど佛教のみであつた、無論他の宗教らしいものがあるとしても、無論それは宗教と云ふ程のものでない、宗教と云へば即ち佛教と云うて宜いと云ふ時代がありましたことは、諸君御承知の通りであります、さう云

ふ時代にあつては、一體此の内に幾多の分派が出來、派が分かれて、互ひに相争うて居つた所で、宗教は佛教の外はないのでありますから、假りに争うた處で、佛教に取りて敢て大なる不都合を來たしたのであります、併しながら今日はさう云ふ昔の、宗教と云へば單に佛教一つであると云ふ時代とは大變に變つて居るのでありますことは御承知の如くであります、國內に於ける宗教は、決して佛教に限りません他にも在ります又今後如何なる宗教が発生するかも知れず、或は他に在る宗教が日本に這入つて來るかも知れることは出來ないのであります、さう云ふ次第でありますから、今日に於きましては、此の佛教の各派の如きも、決して徒らに内部に於いて區々の争ひを事にして居る時代ではないと思ふのであります、どうしても是れは佛教と云ふものが自然一のものになつてやらなければならぬと云ふ時期が來たるであらうと思ふ、併ながら今日までの現狀に於きましては、私共が迂濶な眼で見て居りましたも、却々容易に佛教が、派が分かれて居るの

を統合すると云ふ様な時代の來ることは、頗る六づかしい様に考へられたのであります、現状を見て居りまして、どうも容易に各派の争ひを排し、驟然融和をすると云ふ様な域に達することが出来るかどうか、甚だ是れは六づかしいのではないかと斯う觀察をされて居つたのである、それは斯う私が申上げては甚だ潜越かも知りませんが、私共自己のみならず、他の人の意見を聞いて居りまして、随分それは困難の様に承つて居りました、所が従前頗る争ひが強よかつた所の日蓮宗各派の方々が、大に時勢に順みまして、逆ても從來の如きことではいけない、斯う云ふお考へになりまして、それで此度此の各派の統合と云ふことを計畫されて、遂に今日統合のことを世間に發表すると云ふことと迄になられた、即ち茲に非常なる光明を見出すことが出来た、是れて真に此の諺に云ふ空名危音の感があると云ひますが、私共は此の事に依りまして真に空名危音の感がある、斯う云つて宜からうかと思ふのであります。

規約も成立したのであります、さうして此處に目出度御發表の時期に達せられたのでありますから、此れ以上は今後充分此の統合事業を完成して、非常に立派な成績を挙げられると云ふ事は、是は實に我々の希望する所であり、又何卒今後皆様が困難を排して統合事業を完成せしむることに力を盡され、さうして尙ほ一層偉大なる目的に向つて進まれますと云ふ事を私は深く希望するのであります、何れに致しましても、此の事業を爲すと云ふことは、誠心誠意で行らなければならぬ、誠心誠意を以て行つる時には、其事業が必ず成るのであります、終りに臨みまして、皆さんが誠心誠意を以て此の事業を遂げられんことを希望致します、一言御悦び申すと同時に、私の希望を申述べた次第で御座います。

宗教は社會改善の力也

(7) 近來社會改善の聲は到る所に高まり、健全なる第三文明を建設せられぬと云ふ論議が旺んじつて來た、其論議は一定して居らぬ、隨

此の事柄には我々共も亦深く望みを囑し、今後十分なる——今日發表された結果に依つて、十分なる努力をなされて、統合と云ふ事業を完成せしむることを私は望みます、又完成されるであらうと云ふことを信ずるのであります、それと共に先程も申上げました通り此れは獨り日蓮宗の方々ばかりの問題でもありませんが、併し承はる所に依りますれば、日蓮聖人の主義は統一主義であると云ふことを承つて居りまするので其の私の承つて居ることが誤りがないとすれば、今後此の日蓮宗の統合の事業を完成せしむると共に、更に一層偉大なる事業が皆様の解決さるべき問題となつて居るのではないかと思ふのであります、併ながら一體此の事業を成し遂げると云ふことは、却々困難の伴ふことであることと云ふことは申す迄もありません、殊に今回の如き宗教上の事業と云ふものは、他の事業よりも非常に大なる困難の伴ふものであることと云ふことは、又私共の如きと雖も推察することが出来るのでありますから、既に今日非常に困難であります所の統合

分亂暴な説もある、聞けば疾病不具虛弱犯罪者低能者などが、健全なる部分と雜然相混じて生殖作用を營んで居るのに制限を加へ、不適者の繁殖を人工的に撲滅せんことを唱へて、絶て之を邊島に追放して健全なる分子と雜居せしめざる方法を取り、現在及將來の損害及苦痛を除き去る所以であると論斷して居る、之が現在勢力を占めて居る、而し白碧生は斯かる改善説に賛するものではない、科學者は人間の本能に反する制度を人間社會に施さうとして居るのではないか、全然人間界より惡分子を人為的に追放してどう云ふ社會を作らうとするのであるか、おまそ人間たる以上一分も惡性分子なきに至るであらうか、而かもそれを器械的に改造することが出来やうか、亦權力を以て壓迫強制を加へ、之に由りて社會狀態を改めようとする政治論者もあるが、政治は行爲の外部に關係するもので、内部の動機に關して居ない、政治は人間の心情の奥底には何等の響きがない、寧ろ文明生活の大なる害惡は、政治的色彩を帯びたるその中より生れる様に思ふ、到底政治を以て善良な庶民を産み出すことは出来ぬ、人間の心の奥には、政治を以て満足せしむることの出来ぬ深い且つ古い飢渴がある、其飢渴を満足せしめない以上は、眞實徹底の社會改善は爲し得べきものでない、そこで宗教的に各個性に善異なる感化を以て、不善の性格を轉換せしむる運動を起さば、必ず改善せらるゝ事とおもふ、されば其運動が大なるほど改善の實が擧る、別に惡性分子を追放せずともよからう、追放するとは善薩的でない、社會改善は理窟でない、實際問題である、日蓮主義を以てせば成績の擧る事は適合である。

統合事業に對歡喜と希望

法學博士 山田 三良

諸君今日茲に日蓮宗門下七教團統合の事業が成立致しまして、此の盛大なる祝典を擧げらるゝに方りまして、私が一言茲に皆さんの清聴を汚すことを得ましたのは、眞に幸榮とする次第であります。

私は日蓮聖人を渴仰する信徒の一人としまして、亦昨年十一月八日池上本門寺に於て、七教團管長猥下及び代表者方々がお集りになりまして、此の統合問題を抑も御決議になる始めから、僧俗信徒大懇親會の發起者の一人でありました關係より致しまして、今日此處に開宗以來未曾有の盛典を擧げられると云ふことを見るに就きまして、眞に衷心より歡喜に堪えざる次第であります、先づ第一に此の點より致しまして、七

教團管長猥下を始めまして、是れに關係せられました七教團の各位に對して、厚く感謝の辭を呈したと思ふのであります、又此の統合事業に就きまして不肖ながら臨時顧問の席末を汚がす一人でありますので、此の點より云ひますれば、今日の來賓諸君に對して衷心より一言の謝辭を述べたいと思ふのであります此の炎暑の氣候にも拘はりませず、御多忙の際をお繰合せ下されまして、此處に態々御出席下されましたことは、諸君と共に深く感謝する次第でございます、殊に文部大臣閣下は、止を得ざるお差支に依りまして御缺席になりましたので、其の代理と致しまして柴田宗教局長閣下の有益なる御懇切なる祝辭を賜はり、殊に

我々の事業の前途に對して、大なる希望を寄せられましたことは、諸君と共に厚く感謝致さなければならんことと思ひます。

扱此の統合問題と云ふものは、我が聖祖門下に於きましては、決して昨今の問題ではないのであります、既に數百年來の一大懸案であります、我が宗門の爲に身命を捧げられたる様な先聖前哲のお方々は、常に此の問題を念頭に置かれて居つた者が何人あるか知れないのであります、斯かる數百年來の一大懸案でありまして、昨十一月に至つて小泉日慈猥下、阿部日正猥下、本多日生猥下が御發案になりましたと同時に、他の教團の管長猥下方も、響きの聲に應ずるが如く賛同せられました、遂に十一月八日を以て聖祖鶴林の靈場に於きまして、統合大方針の決定を宣言せらるることとなり、同時に僧俗信徒大懇親會を開設せらるるに至つたのであります、斯の如きことは數百年來訓練し來つた結果でなければ到底人事を以て測り得べからざる程の大事業であります、此の氣運を見るに就き

まして、尙ほ併し教團の中には、いろ／＼の疑惑を抱かれる方々もありましたし、或は今日に於きまして斯くの如きことが出来るであらうか出来ないであらうかと云ふことを疑念せられたお方も少なくならずと思はれるのであります、唯今も仰せられた様に、我が宗門は不幸にして互に相争ふことが激烈でありまして、斯う云ふ激烈に争ふ各分派が、一の下に統合すると云ふことは奇蹟ではなからうかと云ふことを云はれましたが、御尤の次第でありまして、日蓮宗各派か一致共同すると云ふ様なことは、到底奇蹟と云はなければならぬ程の一大事實であらうと思ひます、併し斯の如き事實を完成して、今日此處に其の成立を發表するに至りましたに就きまして、是れが任に當られました七教團の方々が實に誠心誠意、至誠を以て一層日蓮大聖人の精神に答ふると云ふ大決心を以て茲に統合規約を完成されるに至つたと云ふことを承知して居るのであります、此の點に就きましては我々僧俗共に、此の當局のお方々の慘憺たる苦心と、秋霜烈

日の如き熱誠に對して皆さんと共に深く一感謝の辭を陳べたいと思ふのであります、併し事が成就すると云ふのは、決して成るの日に成るにあらずでありまして、今日此の成立を見るに至りましたと云ふことを視るに就きましても、前に申上げた如く數百年來養ひ來つたる結果に外ならないのであります、之れを近きに考へましては三教會同の際に方つては、聞く所に依れば各教團の責任當局者が、先づ聖祖門下各教團の統合を御發議になりましたのであります、又更に少々遅れば明治三十五年に、彼の開宗六百五十年の記念大會を開催せられました其の席上に於て、全國より集まられたる僧俗の方が、田中智學先生を議長として、記念大會の第七號議案として、「日蓮門下一統の合同統一を實行することを期す」と云ふ決議を、満場一致を以て確定されたのであります、又氣早やなる清水梁山先生の如きは、唯々「實行を期する」位では満足されなくして三十五年の其の時を以て既に集まられたる單稱派及び顯本法華二宗の合同を、即時に實行すべきことを御提

案になりましたのであります、是れに對しても來會各位は満場一致決議されたことは「妙宗」の第五編に儼然として存する所であり、又更に遠く遡つて見ますれば、田中智學先生の如きは、三十年來宗門の維新を絶叫されまして、純乎たる信仰を復活しなければならぬと云ふて、今以て天下に號叫されて居るのであります、是等の方が皆な一大恩人でありまして、其の恩誼功德が集まりまして、以て今日の此の成立を發表するを得るに至つたのであります、我々は斯の如く數へ來れば尙ほ幾多の大恩人と云ふ者が在ると云ふことを諸君と共に認めなければならぬのであります、而して唯今は未だ統合成立の發表だけでありまして、爲すべき事業は今後にあるのであります、隨つて今日此の場合に於いて功を論じ賞を行ふと云ふ時ではないのであります、況んや已れが彼れが誰れかと云ふやうな各々の我を主張すべき時期でないのであります、又今日の統合の成立と云ふものは、決して一人一個の私すべきものではないのであります、時運の然らしむるもの

と云はねばならないのであります、時運の然らしむる所、詳しく申すれば高祖日蓮大聖人が統合をさせられたのであります、何人が最も多く善哉々々と頂を撫てらるべきお方であるかは、大聖人の御計ひの中にあるのであります、我々の私に議すべからざる所であらうと思ふのであります。

我が日蓮門下の分派と云ふものは、分派そのものは決して悪くはないのであります、何れの派の開祖でありましても、日蓮大聖人に弓を引いて分派なされたと云ふお方はないのであります、何れも皆な日蓮聖人の大精神に一身を捧げんが爲に、大聖人の主張を身を以て買かんが爲に各々分派を立てられたのであります。隨つて分派の依つて來たる所と云ふものは、全く公明正大なる聖人の大精神に副ふべき護法心から出て居るのであります、一旦の私心から出て居る分派ではないのであります、此の點に於きまして他宗門の分派と日蓮聖人の分派と云ふものは、大に其の意味を異にして居るだらうと思ひます、然れば何故日蓮宗派と云ふも

のが、斯の如く分派するに至つたかと云ひますと、其の由つて來る原因を尋ねて見ますれば、結局是れは政治上の迫害と云ふことに外ならないのであります、日蓮大聖人は御承知の通り佛敎の統一を企てられ、佛敎の大義名分を明かにせられると共に、此の妙法の覇者たるべき大日本國の國體の名分も明らかにせられ、隨つて幕府の如く政權を私すると云ふ國家の政治機關の存在を許さないのであります、此の教義が即ち北條の壓迫となり足利の壓迫となり、徳川の壓迫となる所以であります、苟くも幕府と云ふものゝ存続する間と云ふものは、言ひ換えますれば我が大日本帝國の國體が浮雨に覆はれて居る間は、大聖人の敎と云ふものは決して光顯すべきものではありません、聖人の敎は斯の如き状態に於きましては聖人が云はれました様に、法を知り國を思ふの志を生ぜしむべき所であり、大忠を懐いて未だ微望を達せずと常に嘆せざるを得ないのであります、此の時代に於きまして各宗各派のお方が、

寧ろ玉となつて直に碎けるであらうか、或は瓦となつても全ふして一時時節の到来を待つてあらうか、是れ即ち日蓮宗各派の由つて分かれる所であり、急進派となつて玉碎するも瓦全を期せずと云ふ派は、必ず他の派とは意見が一致しない譯になつて、又今の時に政權と争うた所が仕方がない、止むを得ないのであるから暫く時期の到来を待つに若くはないとして、隱忍以て忍ぶと云ふ派は又他の派と異なります、斯の如くにして八宗九宗の派が出来ました共、其の根本精神に至りましては、何れも大聖人の精神を如何にして護持すべきかと云ふことになり、實に其の精神は一に歸すべきものであらうと思ひます。故に何れの派が悪うかつた、善かつたと云ふ是非の詮議は、今日に於きましては爲すべきものでなく、爲すべからざるものであらうと思ひます、併し唯今はさう云ふ理由があるかないかと云ひますのに、諸君も御承知の様に我が國體は王政維新に依りまして、國體の自覺となり、王政復古となり、再び天日が輝いて來たのであります

而して明治天皇陛下は信教の自由と云ふことを我が國民に保障せられまして、如何なる宗教を信仰するも汝等國民の勝手であると宣ふたのであります、言ひ換へれば今日は天地の公道に基いて、各宗教が優勝劣敗の世となつて居るのであります、誰が如何なる宗教を信じましたも、幕府時代の様に日蓮宗のみを切支丹破天連と同様に壓迫すると云ふことは、今日は無くなつたのであります、聖人の教義と云ふものは、王政復古と共に自由に之れを宣傳し得ることとなり、之れを發揮しなければならんと云ふ時代に到達したのであります、然るに此の統合事業が維新の際に成るべくして何故成らなかつたかと云ふことは、是れには又大なる原因があるであらうと思ひます、それは即ち國體の自覺と云ふことから申すれば、維新の際を以て統合せらるべき筈でありましたが、我が明治政府に於きましては、數百年以來の陋習を打破して新しき日本國を建設せなければならなかつたのであります、隨つて西洋の文明を輸入するに急でありました其の結果として、歐洲文

明の科學的思想、物質的文明と云ふものを輸入するに急でありまして、精神的文明を建設することに就きましては、政府は實は怠慢の罪を免かれないのであります、否怠慢と云ふよりも、餘り爲すべきことが多かつたものでありますから、明治政府の手が其處まで行届かなかつたのであります、斯う云ふことでありますから、我が國家も宗教信念と云ふ様なものを重んぜざる時代でありましたから、此の際には先哲は始終盡力されたにも拘らず、尙ほ統合が成立するに至らなかつたものでありませうと私は信ずるのであります、併し今日はどうかあるか、大正の今日はどうかあるか、斯う云ふ氣運が儼然として存在して居るのであります、それは何故であるかと云へば、内の方から……宗門内に就いて申すれば、分派存立の理由は全く無くなつて仕舞つて居るのでありますにも拘らず尙ほ舊慣に依つて或は多少の利害の爲に、或は多少の感情の爲に、依然として教團を存して置くことと云ふことは、是れは甚だ

意味なきことであります、單に意味なきことであるのみならず、上は大聖人の精神に反するのであります。又其の各派の開祖の精神にも反するものであります、各派の開祖の様な立派な方が今日に出現しましたらば、私は決して一派を開かれる様なことはなかつたらうと斷言するのであります、然れば今日從來の慣習に依つて以前の如く分派を維持し、それに執着すると云ふことは、何等理由なきのみならず宗門の大精神に反し、開祖の主義に反すると云ふことでありますから、是れは分派と云ふものは無くならなければならぬと思ひます、外はどうかあるかと云ふと、明治政府は精神的文明を建設するに手は及ばず過ぎましたが、今日我が國家は其の弊害に堪えざることを自覺するに至つて居るのであります、我が國民は此の五十年の間に讀らず知らず輕躁浮華の風俗を養成しまして、物質的の物のみを重んじ、精神的の事は甚だ輕んずる様になりました、人間最後の關係に何等の尊い意味をも認めない様になつて來たのであります、てありますから

社會の何れの方面を觀ましても、動搖に次ぐに動搖を以てして居るのであります、確然として精神を確立して居ると云ふものは、甚だ少ないてはありませんか、商工業に於きましても實業に於きましても精神社會に於きましても學問社會に於きましても、藝術社會に於きましても、我國の現代の文明と云ふものは何等の確信なき文明である、根底なき文明であると云ふことは遺憾ながら認めざるを得ないのであります、故に今日即ち大正の時代に於きましては、上は國家の當局者より下我々に至る迄、此の現在の狀態はどうかしなければならぬと云ふことを、深く感ぜざるものはないのであります、而して之れを如何にすれば宜しいかと云ふのに、我々は自分の心に柱を立てなければならぬが如くに、日本の國家——日本の國民に又中心となる柱を立てなければならぬのであります、「我日本の柱とならん」と大願されたる聖人の大精神は、今日に於てこそ何人も之れを渴仰せざるを得ざる次第になつて居るのであります、我が國民に今日は日蓮聖人の精神を扶植

して、之れを普及し、之れを國民の精神とするより外に、現在の憐れなる狀態を救ひ出す道は決して無からうと信ずるのであります、然かのみならず又眼を海外に放てば如何、今日では世界のあらゆる強國が皆な戰爭狀態となりまして、世界を擧げて一大修羅場となつて居る譯ではございませんか、斯の如きことは容易なることではないのであります、世界の文明は或る意味から云へば破滅すべき時期に達して居るのであります、何か今まで通りより、方向を轉換しなければならぬ時期に達したことが、五大洲を擧げて戰亂の巷となつた所以であります、而して之れを如何に轉換すべきか其の方向を如何に向くべきかと云ふと、西洋に行はれ居る宗教が其の力のないとは、それ自身が證明して居るのである、西洋の學問、西洋の哲學、西洋の科學すべて皆な此の狀態を如何ともすべからざることは、即ち自然が證明して居るのであります、然らば何を以て之れを爲すべきかと云ふと、是れは宗内を統一し、一團浮提の大思想と云ふものを一つに集め、あらゆる人

類一切の衆生と云ふものを、同じ主義、同じ精神、同じ大法に依つて救ふと云ふ此の大宗教が光顯される外はないのであります、して見れば日本國內の事情のみならず、世界人類全體と云ふものは、日蓮聖人の世界統一の大方針が、今將に光顯せらるべきことを望んで居るのであります、外には此の要求あり、内には分派存在の理由がないと斯う云ふのでありますから、今日何人も唱へ出しまして、日蓮門下の各派は合同統一せざるを得ないのであります、之れを唱ふる人の如何に依つて彼是議論を爲し、誰れが云つたから賛成の、彼が云つたから不賛成のと云ふやうな薄弱なる問題ではないのであります、苟くも大聖人の弟子であり檀那であり、日蓮聖人の門下として題目の一遍も唱へることを知つて居る者である以上は、何人も誰れも合同せざるを得ない、統合せざるを得ない、統合合一は正理であります、現代の要求であります、世界の要求であります、此の要求と矛盾するが如きは、内は宗祖に對して叛道人であります、外は人類の思想の進歩に貢獻

することを欲せざるものであると云はれても如何とも辯解の辭はなからうと思ふのであります、私は此の大正の年代に於きまして、我が日蓮門下か斯の如く一致共同し、さきに小泉親下が御捧讀あられましたやうな異體同心の祖訓を守りまして、今日此處に開宗以來未曾有の大盛典を擧げらるゝに至つたと云ふことを、眞に衷心より歡喜に堪えない次第でございます。て統合と云ふのは尙ほ成立と云ふことを發表されませんでしたのであります、云はゞ嗚々の聲を揚げし赤ン坊に過ぎない様なものであります、之れを大成し完成すると云ふことは今後の事實であります、今後此の事業を完成すると云ふに就きましては、宗門の僧侶諸君が極力是れに當られると云ふことは素より論を俟たない所でありまして、獨り僧侶諸師が是れに盡力されるのみならず、我々在家の信徒一統に於きまして、常に水魚の思ひを爲しまして、僧侶諸師と共に、此の大業を完成することに努力しなくてはならないのは素よりであらうと思ひます、此の問題は唯今宗教局長

閣下が云はれましたやうに、日蓮門下の統一共同に止らずして、行く／＼は……我國に於て今日あらゆる世界の宗教が陳列されて居りまして、世界中のありとあらゆる宗教が日本國內に横まつて居りますが、其の總ての權教邪教と云ふものを一切折伏して仕舞ひましてさうして諸經一佛乘に歸しまして、さうして南無妙法蓮華經のみひとり繁昌する、あらゆる思想を統一して皆な一乘に歸せしめると云ふ一天四海皆歸妙法の大精神を實現するに至るまで、我々は努力奮闘しなければならぬのであります、而して此の問題は素より軍に一元一派の私意ではないのであります、今も宗教局長閣下も云はれる如く、此の統合と云ふことは決して我々一黨一派の私事として賀すべき喜ぶべきことではないのであります、之れを正直に云へば我が國民の思想問題であります、我が國家發展の最大問題であります我が國家を今後如何に發展せしむるが、我が帝國の地位を如何にして宇内に輝かしむべきかと云ふ最大重要問題は、懸つて此の思想の統一問題にあらうと思ひま

す、して見れば此の問題を完成すると云ふことは、獨り日蓮宗の僧侶諸師のお方々、若くは日蓮宗の檀徒のみの努力すべき問題ではないのであります、苟も世を憂へ國を思ふ志士仁人は、如何なる人でありましたも此の問題に努力すべき筈であらうと信ずるのであります、軍人であらうが政治家であらうが實業家であらうが、法國冥合の此の大理想を實現するに向つて努力奮闘すると云ふことが、此の現代に生れたる我々人間の責任であらうと思ふのであります、況んや千載一遇の大典を擧げられる所の今年に於きまして、此の日蓮宗門の統合の盛業が發表されると云ふことは、容易ならざる出来事であらうと私は信ずるのであります、法を知り國を思ふと云ふ聖人の大精神が、今や日蓮門下に統一感孚しまして、此の國家大切の時期に方つて、此の國民の思想を統一すると云ふ大精神が發表されると云ふことは、事實そのもの、中に大たる意味が包まれて居らなくてはならないことであらうと私は信ずるのであります、是れに就きまして我々日蓮門下の者が

生れて此の聖代に遭ひ、此の事業に幾分なりとも各々が貢献すべき責任を持つて居ると云ふことは、我々は非常に歡喜に堪えざる所であると共に、此の時代に生れたる光榮ある責任を首尾よく盡すと云ふことをお互に努力しなければならぬと思ふ、今後統合の事業に就きまして、尙ほ幾多の難問題が實行の上に於て現れて來るであらうと思ひます、此の際に於きまして宗門の當局の方々は勿論、我々門下の一人たる者は、男女を問はず長幼を論ぜず、唯々日蓮大聖人の心を心と致しまして、以て此の聖祖開宗の目的を貫徹するやうに互に身命を期して努力せんことを此處に皆さんと共に誓つて置きたいと思ふのであります、是れが今日の賀辰に方りまして私が衷心より一言申し上げたいと思ふた所でありまして、私は歡喜の感情と感謝の情に迫られました、言ふべき所前後致しまして、秩序完全せざる所あります、其の精神をお汲取り下されまして、希くば我々は聖人の御手を以て頂を撫でられるやうに將來なりたいたいと、諸君と共に祈つて止まん次第であります。

折伏は人を救はんが爲也

折伏とは亂暴強弱を斷く名詞ではない、唯々強弱の調子であると思ふのは全然誤りである、日蓮主義に高唱する折伏は、積極的の法華經を擴張する方法である、主義擴張の上には、猛烈なる攻撃も敢てせねばならぬ、思想の墮れるを正して健全なる大道に導かんが爲に、其根柢に向つて痛撃を加へるのである、根據のない交戰的意味でない、思想革正運動の激烈なるは皆是れ折伏である、折伏は慈悲の結晶である、因はれたる偏狹の思想者流は、正面より眞向に鞭を加へなければ覺醒するものがない、安んずるの反對は折伏である、現代の思想界が、あらゆる癩毒に犯されて中心を失ひ、其趣くべき道に迷ふて立往生の状態に在るの時、一段聲を張り上げて人生の歸趣を明かにしてやらねばならぬ、人を救ひ向上せしめんが爲の折伏である、折伏なくんば正邪の裁定を與ふることが出来ぬ、故にこの思想は、不健全なる文明の充進するに従ひ、健全なる思想を以て大折伏を斷行せねばならぬ、日蓮上人が法王の家人は無勢にして敵は多勢であつたけれども、奮然起て權實二教の戰闘を開始して突撃を試みられたのは、不健全なる反逆的思想軍の陣營を破壊して、正義公軍の徳化に浴せしめんとする慈悲の大折伏である、この折伏があるが故に、開眼なる思想界に一點の光明を存するのである、思想界は昔も今も混亂状態である、さうして眼の開いて居る盲目が多きものに驚かざるを得ない、盲目であつても盲目であることを覺らぬ、されば眼がつても押へ付けて藥品を點眼してやらねばならぬ、眞に之を救ふには何うしても積極的なるを要する、盲者始めは亂暴だと思ふかは知らぬが、點眼の力により光りが見える様になれば感謝せずには居られまい、慈悲の行動に泣くに至るであらう、日蓮上人の折伏は突撃的運動である、即ち日蓮主義の四個柱は邪思想攻撃の思想運動である。

宗教の撰擇と人格の修養

(安野會 編演)

辯護士 柴 崎 守 雄

人間は身體が大事である、身體は人間の寶の中で一番尊とい寶である、肉體を壯健にせなければ活動が出来ぬと云ふ事は、誰しも知らぬものはありません、そこで肉體の營養分を取ることに力を盡すものは多いのでありますが、人の働きの根元たる精神の養生に努めて、健全なる人格の發展を図ることに注意する人は少ない様である、私共は如何に肉體が壯健でありましても、精神上の修養を怠りて居りますれば、其人の精神は瘠せ衰へて居りますから立派な活動は出来ない事と存じます、それ故に人は精神を充分に訓練致さなければなりません、精神の問題を餘所事に考へて居りますると、世の悪い風潮に支配せられて立派な人となる事

は出来ません、一例を申しますれば、爰に三十圓の月給取の人が、自分の身分を考へずに他の様子を真似して、三圓の帽子を冠つて五圓の靴を穿いて得意がつて居るのは、それは不可能の事ではあるが、真似をして見たい、真似をすれば直ぐ一家の生活は窮乏を告げる事になる、生活上の困るのは始めから解り切つた結果であるが、之を知りて居りながら人の真似をするのは虚榮心と云ふのである、虚榮心は秩序のない自墮落の生活でありませぬ、斯う云ふ生活は人間の眞正なる意味を缺いて居るのであります、我々はさう云ふ心の起ります時、之を抑へる事が出来るか出来ないか、茲に於て精神が壯健であるか、或は病に罹りて居るかが、

るゝ所である、斯う云ふ事は悪い、斯う云ふ事は善いと云ふ事を知つて居つても、イザと云ふ場合に於て、悪い事を抑へて善事を成し遂げることが出来なければ健全なる精神であるとは謂はれないのであります、精神が健全であつて充實して居りますれば、善惡の判断が間違なく決しますから、悪い方へは近寄らない事になります、人の一切の行爲は精神が土臺である事を自覺せなければなりません、孟子の中にある事でありませぬ、無名指即ち俗に薬指の曲つて居る人が、別に痛む譯ではないけれども體裁が悪いから癒したいと思つて居る處へ、秦楚の遠方に之を癒す人があるのを聞いて、旅金と時日とを費しても行くものはあるが、自分の心の人に若かざるを省みて癒さうとするものはない、身を支配する心の曲つて居るのを氣付いて居るものがないと慨いて居ります、昔とは違つて今日は世が開けて居る、近い所に倫理の先生も居れば學者も居る、宗教の説教も講演もある、けれども忙がしい暇がないと云つて心を立派にする事に氣が付かない、當

今の人々は何うも清い方が少なくて腐敗の方が多くなつて居る、虚榮に藉られて出来ない事を無理に致して居るから、生活が困り借財も出来る、そこへ人生は思ひ通りにならぬものだなどと悲觀して精神に異状を呈して来る、正直な人は申譯がないと云ふて自殺する、太い奴は人を胡魔化して平然として居る、處が世の中は斯う云ふ人を腕利きだ伶俐者だと賞める様な風になつて居る、又此頃の新聞紙上には忌はしい事計りである、即ち人殺しが殖えて来た、四人殺があり七人斬もある、さう云ふ亂暴人が何時来るか分らぬ、我々に戸締をして鍵をかけて枕に就いて居るが、決して人事とは思はれない、斯様な亂暴人のあるのは誰れが悪いからであらうか、それはその心が悪いからである、之を打ち捨て、置けば銘々の身の上に懸る、近頃は斯う云ふ發狂めいた人物が多くなつて来た、金がなくともあると間違ひらるれば仕方がない、どうしても相互に悪い人の少ない社會に改造せねばならぬ、之は世の中に生活して居る人々の義務である、而るに自分共は食ふ

に困るものであるから知らぬと云ふものがある、けれどもそれは心の病は何時までも癒らない、自分の力が足らないために出来ぬとしても、一人でも癒して行くことに盡さねばならぬとも云ふ、元來心の病を癒すのは、活動の根源を壯健にする所以でありまして、之は醫學博士にも癒すことは出来ぬ、この心の病は宗教の力に依るより外は道はないのである、而るに何事でありませしやう、宗教の大切な譯柄を氣付かざるもの多きは情ない次第であります、中には、自分の宗は淨土宗であり禪宗であり法華宗であると云ふものもありませしやうが、而らば其宗の主義主張は何であるかと云へば、明かに答へ得るものはなからう、更に一步を進めて天地宇宙は何う云ふものか、人は何の爲に生れて何うして死ぬかと云ふ事が解らなければ駄目でありませし、神なり佛なりの意識が明かになつて居りまして、如何なる論客が來ても退かない主張定見がなければならぬのである、それとなければ其宗旨の信仰者であるといふ事は出来ぬ、昔しから傳はつた宗旨を守りて

居ると云ふ人の中には、少しも佛敎の尊とい意味を知らぬものが多い様に思はれます、このごろ政黨熱が盛んでありますが、政友會でも同志會でも國民黨でも主義綱領がある、政黨員は皆之を知つて居る、而るに何の宗旨の檀家だといつても主義を知らなければ資格の無いものである、自分の精神を支配する宗教の綱領を知らないで、傳來の宗旨に付いて居ると云ふ事は誠に恥かしい事ではありませんか、主義綱領を知らない人は宗教上の無所屬者である、人にして宗教なきは既に亡びたるものであります、宗教の事は何も分らぬどうでも宜いではないかと云ふものもあるが、其論據はあまりに薄弱ではありませんか、宗教の本質内容の善いか悪いかを調べるのは尤も必要である、時代に適ひ人心に力ある善き教を擇ぶのは、人間たるの義務であると信ずるのであります、例へば先祖が足袋屋であつたから何時までも足袋屋でなければならぬと云ふ譯はなし、殊に現今は憲法の上に信敎の自由を許されて居る哲學より考察しても科學の批判に照しても、破ること

の出来ない完全なる敎に就くべしであります、立派なる敎を信ずるのが賢い人の態度である、例へば、世の進歩に連れて家は瓦葺になつて行くが、草葺の職人は時代を看破して職業換をするのは當り前で、そうなければ生活を營んで行くことが出来ぬ、愚でない人はそう云ふ決心を以て生活の基礎を定めるのである、而して人間の精神界に於ても、落付處を定めるのは一番大事でありまして、即宗教に依らなければなりません、而し宗教と申しても何れでも宜いと云ふのでは無い、之を擇ぶのが必要である、何の宗教の説敎でも能く聽いて、其中に何れが一番正しいかと云ふ事を決定するのが大事であります宗教は何でもよいと云ふ様な人は劣等なる人格である、さう云ふ人は眞に可哀相ならぬ、宗教が悪いと其影響は取り返し付かぬ事になる、日本歴史で有名なる源平の時代に平重盛と云ふ人がある、この重盛は日本一の伶俐者と云はれたのであります、どんな死に態を致しましたか、父親の清盛は心得違をして畏れ多くも天子様を遠島に流し奉り

まして、そこで子の重盛は再度諫言を致しましたけれども、父清盛は一向聽き入れません、のみならず貴様等の知つた事でない生意氣な言を云ふなど叱り付けられましたから、子たる重盛は、天子様に忠を盡さんとすれば親に孝を爲すことが出来ぬ、親の命を守り孝を爲さんとすれば忠を盡すことが出来ぬ、進退二に谷まると云つて自から熊野神社へ祈誓を立て、何ふ云ふ死に様を致したら宜しいかと願つたと云ふことである、實に呆れて物が言へぬではありませんか、今の人でありますれば、天子様に忠義を盡す様な場合に親が不忠の振舞ある時は親の首を取ても、天子様へ忠義を申上げる事は知つて居る、一人として大義親を滅すと云ふ道理を心得て居らぬものはありません、而るに重盛程の人物が後世人に笑はるゝ様なことをしたのでありませしやうか、それは種々の原因がありませしやうけれども、其根本の原因は宗教が悪いからであつたのであります、重盛の信じた宗教は法華經でない日蓮上人の主義でないのであります、是は一實例ではありませ

すが、宗教の正邪が如何に人心に影響するかを知るこ
とが出来ないのであります、宗教の力は偉大であります
から、其内容本質を撰擇して信仰せなければなりません
、私は、母方が法華宗で、父は他宗でありましたが
一家悉く法華宗に改めました、私も今日では熱心に信
仰して居る一人である、日蓮上人の教が天地の道理に
契ひ、慈悲活動の偉大なるに感動するものである、盲
目滅法に信ずるものでない、信仰に入りますれば煩悶
は除かれまして無限の勇氣が起つて参ります、努
力勤勉の人となりまする、懈け根性は全く無くなりま
す、懈けて居つて金持になりたいと云ふ様な間違つた
心は起りません、日蓮上人の教は天地の大道でありま
すから、法華信仰家は大道を實行して居るものであり
ます、私は本門の御本尊を御祭りをして、自分が修行
する計りでなく廣く一般の人に信仰を勧めて居ります
るが、頑迷ではない積りである、若し他宗の學者に道
理上遣り込めらるれば、私の方にも立派な人があるか
ら聽いて來て道理を戦はして見る、何度戦かつても敗

けたら仕方がないけれども、日蓮上人の仰せには、「智
者に我義破られずは用へずとなり」とありますから、
私の信ずる法華經の理義が破られざる限りは、日蓮
上人の御指導が正しい事と信じます。
私は私現在の信仰の喜びを多くの人に傳へて上げ
たいと念願して已まぬのであります、誰人でも人格の
根本たる精神を向上せしむることは、一刻も忽せにす
べき問題でありません、精神の問題は人の生活の根本
であります、この根本精神の營養を求むるために、一
ヶ月に一度や二度位は仕事を休んでもよいではありま
せんか、茫然遊んで居ると無駄な金を使う、金がなく
なると煩悶が起る、煩悶があると目覺しい活動が出来
ない、安靜會は毎月二回講師を聘して修養講話を開さ
ますから、之を聽いて精神を壯健にして貰ひたい、尙
ほ平常は商賣大事と働いて疲れて休む時は、遠慮はあ
りませんから此會へ御出て下さい、何うぞ諸君自身の
ため、精神上の事に氣を附けられて、正しい信仰に進
みまする様に切望して已まざる次第であります。

▲ 教 學 上 の 研 究

『 三 大 祕 法 抄 綱 要 』

時なる哉、日蓮主義は著しく勃興し來れり、統合事業は將に成らんとなす、日蓮主義の研究は日を追ふて愈々盛んなるべし、本抄は、
各宗教上に於ける最般の批判を興へ中心を示せる教書也、こゝに其綱要を撰ぐ。(編者記)

本書は弘安四年六十歳の時の著作である、三大祕法
は佐渡の國に於て述べられたのであります、佐渡前
は未だ眞實を顯はさなかつたのであります、この事は
三澤鈔(一七〇五頁)に「又法門の事は佐渡の國へながさ
れ候へし己前の法門は只佛の爾前經とおぼしめせ」と
仰せられて居ります、其佐渡の國に於て顯はされたる
大事の法門は三大祕法である、而して三大祕法を充分
に整ひて發揮せられて居るものは法華取要抄(一〇四二
頁)であります、上人の宗旨は三大祕法であることを
顯はされたのである、佛教史上天台傳教の先覺者はあ
つたが三大祕法を明かにして居らない、宗教の建設の

方面に於て信仰安心を興ふることが充分でなかつた、
一念三千の理論は進んで居るが、信仰と本尊觀が定ま
らなかつたので、止觀には修行の場合に於て對象が變
つて居る、時に文珠もあり觀音もあり、其他の佛菩薩
を助縁の爲に之等を本尊として安置するのであるから
宗教第一義の結論に達して居らぬのである、上人は取
要抄に於て「龍樹天親天台傳教の殘し給へる祕法とは
何物ぞや、答て云はく本門の本尊と戒壇と題目の五字」
と云ひ、報恩抄(一五〇九頁)には明かに三大祕法の名を
擧げ、值難事抄(千九十五頁)には、天台傳教は之を宣て本
門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字之を

殘し給ふ」とある、斯の如く三大秘法は分立して居る様であるが、之を總括すれば一の本尊である、本尊を安置して修行する處が戒壇である、戒は信仰の戒めである、題目は本尊に對して信仰を表はす所にある、三なるも根本に返せば一本尊である、この三は宗旨の實體である、本門の三秘と云ふのは法華經本門壽量品を通ふして表はれる本尊である、本門と云ふ名は本覺門と云ひ、眞實の悟りを教へたるものである、門とは能通當體門と云ふて、教によりて悟りを與へるものである、又門は要路と云ふて之に遵つて進んで行くのである、教が基本となつて眞實の悟りを與ふるのである、悟りを得たる上は教は不用であると云ふのは愚論である、教に依らなければ社會人生を指導することは出来ない、而して其同化を受けたるものは思想の中心が確立するから、堂奥に出入しつゝ活動するを得て、實生活に深遠なる意味を加へることが出来るのであります。本門の本尊とは、法華經の壽量品を通ふして表はれる居るのである、絶對の尊敬を拂つて信仰を捧ぐべき

は本尊である、佛教中何れも信仰の對象とすべきものはあるが、それ等は吾人の信仰を満足せしむるものではない、本尊は一切の意義を包籠したる絶對でなければならぬ、この本尊確立の上には、本尊を信ずる規律と守るべき場所がある、若し三が個人だけであるならば戒壇の問題は起らぬけれども、團體の發展と云ふ事になると中心の場所がなければならぬ、日本では伊勢の大廟に人心を集めしめて居るのであるが、上人は更に大宗教大道徳を加へて國民尊敬の中心を定めなければならぬと論じて居る、一切の整頓したる思想より來れるものである、此の思想はあらゆる吟味を遂げて、思想を統一し尊敬の中心を示したものである、禪の授戒や淨土宗の授戒は、其目的が個人關係であるから、戒壇の必要はない、上人は國民の思想を統合し大徳教を建設せんとせられたので、本門の戒壇を主張する所以深大なるを知るべきである、次に題目は題は一部を總括して表はれるものである、一切を總括したる心は壽量品の精神である、其精神は眞理を全

ふするは勿論、佛智に依つて眞理を包み、佛智は佛の慈悲に納まり而して善根功德の力が顯はれ、この一切を籠めて妙法蓮華經の五字と爲し、簡單なる最善形式を作りたのである、而かも此形式が生た力である。

悲智理力妙法五字信仰

宗教には何等かの形式を要する、妙法の深遠なる意味を籠めて與へたのは最善の形式である、人生の心理を研究して見ると、聲字の思想は非常に深いものである、宗教の形式としては超越せることが解る、而して之を身口意の三業に見れば

身(合掌禮拜) 口(唱) 意(信仰)

となる、此の形式を否定して心と心との接觸でなければならぬと云ふものもあるが、之等の思想は徹底せざる低い思想である、元來吾人の心の持續は聲の力に依るものである、然るに之を輕視するものは未だ觀察が定らぬのである、孔子は吾人の精神の順序に就て「詩に起り禮に立ち樂に成る」と云つて居るが、崇高なる

道徳は理論でない、世人は宗教儀式に鐘を叩くなどは人心を低くするものであると言つて居るが、將來益々之等の形式を必要とするであらうと思はれる、漫りに形式の不必要を叫ぶものは或意味に於て文明を破壊するものである、上人が最善の形式を選んだのは、一切の宗教中尤も卓越したる特色であるが、本尊に關しては新尼御前御返事(千九百頁)には
 「其故は此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候へしあまたの三藏、漢土より月氏へ入り候し人々の中にも、しるしおかせ給はず、西域慈恩傳、傳燈錄等の書ども開き見候へば、五天竺の諸國の寺々の本尊皆しるし盡して渡す、又漢土より日本に渡る聖人、日域より漢土へ入る賢者等のしるされて候寺々の御本尊皆かかんがへ盡し、日本國最初の寺元興寺四天王寺等の無量の寺々の日記、日本記と申すふみより始めて多くの日記にのこりなく註して候へば、其寺々の御本尊又かくれなし、其中に此本尊はあへてましまさず」とありまして、多數の寺院に在る本尊は悉く研究し、總合し考察を遂げた

上に表はしたるものである、宗教にして本尊を考ふる
 ことがなければ生命が立たぬ、本尊は宗教精神の全生
 命である、現代における本尊問題はどうか、彼
 の基督教は一神主義を立て、絶対の神と云ふ事を主張
 して居る、淨土宗の如きは單一主義とも云ふべきで、
 多くの中より一阿彌陀如来を取つたのである、日本の
 佛教中には今尚ほ斯かる思想が多い、其他多神主義が
 ある、何でも多ければ能いと云ふので雑多の神佛を祭
 ると云ふ思想が勢力を占めて居る、日本人の宗教的思
 想は概してこの範圍を出でざるものである、およそ宗
 教は統一したる信仰を要するので、心を一點に集中す
 るものでなければならぬ、雑多に分裂して居つては思
 想の統一が付かない斯かる立場に於て世界の文明と戦
 ふならば劣敗者となる、西洋の哲學に云ふ所の汎神主
 義も神は何物にも在ると云ふのであるが、汎神主義は
 純一を缺くの失があり又一神主義は二元論に陥る、浮
 田博士は二元の失と統一を缺くことを調節するを必要
 なりと云つて居る、思ふに此思想は、最後に純一神主

義に入らねばならぬと考へる、則ち本源に統一の一絶
 對がある、その表はれて無數の活動がある、體一用多
 の關係を顯はしたのが、それが上人の本尊の意義であ
 る、上人が「考へ盡す」と云はれたのは寺の縁起なぞで
 はない、曾てアーサーロイドは統一神でなければなら
 ぬと云つて新基督教を主張した事がある、この統一神
 主義は開目鈔に示されて居る教義である、法華經の寶
 塔品より壽量品に至る間は統一神主義である、上人は
 統一神の本尊を光顯するに力を致されたので一切の教
 義はこの本尊の説明に歸せしめ、また一切の教訓は本
 尊を中心として説き下すものなるを知らねばならぬ。
 本書はこの重大なる教義を佛より譲り受けたまひの意
 味を表はして、將來忘れぬために弟子信徒に授けたま
 ふと云ふのである(結文)
 本書の初めに引證せる神力品の文は、本化上行に結要
 付屬する一段でありまして、法華經の綱領を統一し
 て本化に附屬するのである、日蓮主義は要を結ぶ主義
 である、而して如来とは實在不滅の本佛として今の佛

が體現して居る、さうして法は妙法五字の名號である
 名號と云つても單なる名號でない、幽玄微妙なる意義
 がある、之を總括せば名體宗用教の五支となる、名は
 卓越せるを尊ぶ、こゝに云ふ名は總である、體宗用は
 別である、總は別を總し別は總を別するので、總別不
 二の妙致がある、之に因て思想の統一を計りて居るの
 である、神力は用である、迷を去つて悟りに就かしむ
 ることである、般若與樂である、力とは濟度の方であ
 る、この力を妙法五字に包籠するのである、此の力を
 天臺は如来の智慧を指すと云はれたが、上人は如来の
 慈悲を採られた、眞理と云ふのは、宗教としては未だ
 低い思想である、慈悲と云へば眞理も智慧をも包む、
 天臺は觀念主義であるが上人は信仰本位である、秘要
 の藏は如来悟られたる本因本果で、顯體の要路であり
 橋梁である、西洋哲學者は觀念と實在との橋梁は因果
 法であると云ふて居るが、眞實の因果を以て證明する
 本因は、衆生に内在せる佛性論で、本果は實在不滅の
 佛を指すのである、甚深之事は實相の妙體である實在

である、此の重大教義が悉く法華經に於て宣示顯說せ
 られたので、之を一言で表はされたのが、妙法蓮華經
 の名である、故に天臺は之を釋し要を纏めて、名體宗
 用の四であると言はれた、天臺は如何なる經典でも五
 重玄を以て釋教の特色として居る、之は法華玄義に明
 かなる點である、而して教に於て教相の秩序を明かに
 するには、一切經を比較することが肝要である盲斷し
 て謬見を逞ふすることは深く戒しむべき事である、以
 要言之と云ふは如何なる事であるか、四味、三教、及
 迹門の開三顯一の席を立つて近き釋迦と思ふて居つた
 のが、久遠實在の本佛であると云ふことが涌出品以後
 に顯はれた、涌出品までは隠されて居つたけれども、
 壽量品に於ける開顯の妙義によりて本門の本尊と、戒
 壇と題目の五字が現はれたのである、壽量品以前に顯
 はさざりしは、三大秘法の尊とをきを知りしめ、其説き
 出す中に無上の尊嚴が含まれて居るからである、如来
 とか所有之法となるから法佛の關係を示したるもので
 あると解釋するものがあるけれども、之は法と佛との
 關係を示したのでない、この世界に實在の意味を表は
 したので、三身即一の如来である、三身とは佛の徳の
 大なるを表はしたのであります、三身とは實在である

斯かる法は文殊普賢等の分齊に於て、之が付屬を受く資格を持って居らぬから、久遠以來所化の菩薩たる上行に別付したのである、法自體久遠なるが故に久遠の菩薩に付屬するのである、而してこの付屬の法門何れの時に弘通せらるゝかと云ふに、佛の滅後正像二千年を過ぎて第五の五百歳に於て人心險惡となりて聞譯盛んなるの時に宣傳して衆生を救済すべきである、この大法は須らく時機を鑑みて弘通すべきことを忘れてはならぬ、正像の時代は爾前蓮門を弘むるに適して居るが、末法濁惡に至りては教の本體に於て救済の實力を持たぬのである故に出離生死の法にあらざると斷案を與ふる所以である、爾前蓮門は、感情の上に智力の上に活動の上に、完全なる要求満足を充たすことが出来な、故に今の時は一向に本門壽量品に限る、此の法によりて堅實なる信仰に入らねばならぬ、釋迦の教典は教學關係に於て一切の問題を解決し證明し得るものであつて、過去の問題のみを論議して居るものでなく、現代の文明に光輝を與へて將來の發展を促進するものである誰か振はざる宗教の現状を難じて懷疑の範圍に煩悶するものは愚かである、又或は偉人の出現を望んで信仰に入るを得ざるが如きは識見の定らざるもので

ある
壽量品に説ける今留在此は末法の爲である現在の吾人を救ふべき大良薬である、分別功德品には應世末法時と説いてある、斯かる末法の時代に弘むべき三大秘法の實體は如何、第一に壽量品に説き給へる本尊とは無始實在の本佛である、この佛身觀に就ては、古來眞身應身の説ありて、應身の釋迦は假生なりとして賤しむものもあるが、之等は一代佛敎の正系を知らざるもの壽量品に於ては尤も明白に實在の佛陀の應現作用を論じて非生現生と説き、その入滅を非滅現滅と稱し應身の佛陀は眞身實在者の活動なる事を明かにし、又三世十方に應現活動せる佛陀は即ち今の釋迦牟尼佛の作用なることを示し、決して他方他佛に恭敬渴仰の念を散失せしむる事なく、佛身觀出發の道理を正當に進み行ふて其頂上點に達せるものである、即ち事實の釋尊に於て深遠なる意見根據を開顯したる結論である、斯の如く無始實在の本佛釋尊が、常恒不斷の大慈悲意輪より出現し説き給へるものであります(以下八月號掲載)

▲日蓮門下發展史記

▲統合規約成立發表會▼

六月二十日東京日本橋俱樂部に開會、午前十時振鈴の響きと共に千有餘の會衆は洋館樓上に集まる、來賓には文部大臣代柴田宗教局長、上村海軍大將、宮岡海軍中將、松本佐藤上村海軍少將、小原陸軍少將、菅波大佐、木内貴族院議員等數十名、本化司會者開會を宣し、小泉大僧正祖書を奉讀せらる。

祖書

異體同心抄曰異體同心ナレハ萬事ヲ成シ同體異心ナレハ諸事無クコトナシト申ス事ハ外典三千餘卷内典五千餘卷ニ定リテ候。般ノ村王ハ七十萬騎ナレトモ同體異心ナレハ軍ニマケス。周ノ武王ハ八百人ナレトモ異體同心ナレハ軍ニ勝チス。一人ノ心ナレトモ二ツノ心アレハ其心タカヒテ成スル事ナシ百人千人ナレトモ一ツ心ナレハ必ス一事ヲ成ス。日本國ノ人々ハ多人ナレトモ異體異心ナレハ諸事成セン事難シ。日蓮方一類ハ異體同心ナレハ人々少ク候ヘトモ大事ヲ成シテ一定法華經弘マリナント覺エテ候。惡ハ多クナレトモ一善ニ勝ツ事ナシ。譬ヘハ多ノ火集マレトモ一水ニハ過キス。此一門又是ノ如シ南無妙法蓮華經

大正四年六月二十日

統合承認教團管長代表 大僧正 小泉 日蓮

次で嶼村大僧正の宣誓文朗讀あり。

宣誓文

聖祖日蓮カ一門ハ正直ニ護教ノ邪法邪師ノ邪義ヲ捨テ、正直ニ正法正師ノ正義ヲ信スルカ故ニ當體蓮華ヲ證得シテ常寂光ノ妙理ヲ顯ス事ハ本門壽量ノ教主ノ金言ヲ信シテ南無妙法蓮華經ト唱フルカ故也ト今此義ヲ宣揚セントス願クハ願覺アラセ給ヘ南無妙法蓮華經

大正四年六月二十日

統合承認教團管長代表 僧正 嶼村 日正

終つて、本多大僧正左の新願文を朗讀せらる。

新願文

謹ンテ勸請シ奉ル 佛滅度後二千二百二十有餘年ノ間一闡浮提ノ内未曾有ノ大曼陀羅列位ノ諸尊來臨影響悉知照覽アラセ給ヘ伏シテ惟ミルニ 日蓮大聖人ノ御遺訓ハ整束シテ今日ニ嚴存シ法理ノ旨歸化儀ノ安範昭々乎トシテ一點疑ノ容ルヘキ無シ則チ學生ノ主張ハ三道チ一貫シテ一佛乘ニ開顯シ高ク三大秘法ノ法幢ヲ掲ケ以テ一天四海皆歸妙法ノ實土ヲ實現スルニ在リ又一期ノ誓願ハ正シク知法恩國ノ鴻圖ニ存シ進ンテハ衆生濟度ノ行願ヲ成就スルニ在リ故ニ御遺訓ニ曰ク「日ト日ト競ヒ出ツルハ四天下一同ノ浮論ナリ是ノ如ク國土亂レテ後ハ上行等ノ聖人出現シテ本門ノ三ノ法門之ヲ建立シ一天四海一同ニ妙法蓮華經ノ廣宣流布疑ヒナカラシモノカ」ト法子法孫誰カ此明教ヲ服膺シ此抱負ヲ繼承セスシテ可ナランヤ今ヤ歐洲ノ戰亂ハ各方面ニ擴延シ無數ノ人命ヲ損シ多大ノ国力ヲ費シ空前ノ慘狀ニ陥リ而シテ其終局未タ知ルヘ

カラス實ニ酸鼻ノ極ト謂フヘキナリ之ニ反シテ我カ大日本帝國ハ建國ノ理想日ニ章カニ無窮ノ皇運月ニ揚リ日支ノ條約ハ新タニ成ツテ皇威ハ統ニ振ヒ國光中外ニ輝ク國家ノ隆運向ニ慶賀スヘキナリ心ヲ澄メテ大聖人ノ當年ヲ追懷シ小蒙古大日本國ニ寄スト嗚呼セラレタルニ想到スレハ感慨ノ情轉々禁スルカハサレナリ而シテ大聖人ノ威靈ハ今尙ホ靈トシテ我カ帝國ヲ擁護シ給フ其ノ歡喜ノ狀定ニ想見スヘキナリ然リト雖モ職ツテ門下ノ現狀ヲ顧ミレハ其光景果シテ如何僧俗ノ信仰ト氣魄トハ克ク大聖人ノ精神ヲ體認スト謂フチ得ヘキカ教團ノ施設ト活動トハ克ク大聖人ノ抱負ニ副フト謂フチ得ヘキカ思フテ此ニ至レハ誰カ發憤興起セザルヲ得ン今日ニ在リテ猶且ヲ苟且儉安ノ暇ヲ食ルカ如キハ是レ實ニ大聖人ニ背クノ大ナル者ニシテ所謂逆路伽耶ノ人ナリ師子身中ノ益ナリ豈忍レテ且ツ警メサルヘケンヤ

我等各教團管長ノ所見ハ茲ニ全ク相合シ從來分派ノ形體ヲ非ナリトシ邁ンテ各教團ノ統合ヲ是認セリ吾等各管長ノ庶幾スル所ハ之ニ由ツテ内僧俗ノ意氣精神ヲ一新シ外知法思國衆生濟度ノ本分ニ向ツテ邁進セシメントスルニ在リ我等各管長ハ肝膽相照シ赤心ヲ傾倒シテ先キニ宣言書ヲ發表シ又大綱ヲ決議シ更ニ交渉委員ヲ出シテ統合ニ關スル程度及ヒ其方法ヲ協定セシメタリ而シテ今ヤ統合規約ハ締結ヲ了シ本日ヲ以テ之ヲ天下ニ發表スルニ至レ欣幸何物カ之ニ比セン惟フニ此間方案ノ不備事務ノ遺脱等一ニシテ足ラサルモノ之レ有ラン同志ノ士宜ニ隨ヒ之ヲ補正シテ可ナリ要スルニ此一舉ニ由ツテ門下ノ僧俗益正義ノ觀念ヲ高メ齊シク同心水魚ノ慈訓ヲ體シ各稱ノ敬弊チ一掃シ兄弟結ニ同キ末節相爭フノ痼態ヲ脱スルヲ得ハ我等ノ所願ハ已ニ其中ヲ達セシナリ

佛先哲ノ威靈冥助チ下シ聖靈ヲ垂レ群賢邪道ノ輩チシ

テ此淨業ヲ阻止破滅セシムル莫ランコトヲ御遺訓ニ曰ク「當世ハ如來滅後二千二百餘年ナリ大地ハ指サハハツルトモ春ハ花ハカカストモ三類ノ敵人必ス日本國ニアルベシナルニテハタレタレノ人人カ三類ノ内ナルラン又誰人方法華經ノ行者也トサ、レタルランチボツカナシ彼三類ノ怨敵ニ我等入りテヤアルラン又法華經ノ行者ノ内ニテヤアルランチボツカナシ」ト嚴誡ヲ垂ルシテ聲アルチ覺ユ心アル者恐懼戰慄スヘキナリ

謂フニ統合ノ事タル決シテ一時ノ問題ニアラス即チ内ハ源ヲ日蓮主義ノ本領ニ發シタル根本事業ニシテ外ハ時代ノ趨勢ニ順應スルノ壯學ナリ建者安ソ異爭アラシキ而シテ證ムル者モ俱ニ其影響ヲ享ケ順フ者モ逆フ者モ同シ法利ニ浴セン御遺訓ニ曰ク「惡ハ多クセントモ一善ニ勝ツコト無シ」ト正合堂々タリ同志ノ精業奮勵努力セスシテ可ナラン

茲ニ統合規約成立發表大會ヲ開キ諸シテ三寶ノ顯加チ仰キ諸天ノ冥應チ祈ル伏シテ冀クハ廣宣流布ノ大願ヲ成辦セシメ給ハントコトヲ依ツテ恭シク願文一章ヲ捧ケ上レ表懇納受シ給ヘ南無妙法蓮華經

維時大正四年六月二十日

統合承認教團管長代表 本化沙門日生禧首首

終つて各地方門下の諸師より寄せられたる祝電祝辭の披露あり、柴田宗教局長の祝辭演説上村海軍大將の祝辭山田法學博士の演説あり、上村海軍大將閣下の發聲にて陛下の萬歳を參唱し、本化門下の萬歳を壽さ、歡呼奏樂裡に撤式

▲日蓮門下有志大會▼

同日午後一時日本橋俱樂部に開催、宮岡海軍中將開會を宜し、矢野茂氏式辭を述べ、柴田一能氏會程を報告し、田中智學氏一場の挨拶を爲す、脇田權大僧正座長席に就く、諸案の協議に入る、議案の重なる者は

- 一、統合事業に對する根本賛同案
- 一、聖祖降誕七百年慶祝記念事業に關する諸案
- 一、統合期成會を興す建議案

第一議案 有志大會提出にして柴田氏提出理由を述べ柴崎守雄山川智應兩氏の賛成演説あり、滿場可決。

第二提案 戸田聰察氏は本案に就ては短時間にて決議せん事無理なるべし、故に二週間の講習會中に提出ししめては如何かとの賛成演説あり、長瀬愛之助氏は百萬圓の傳道會社を設立せんとの提議を爲す、其内容に就て議論百出せしも座長指名の委員に附托する事とし

金澤天晴會員吉倉清久氏の意見等ありて可決。

第三提案 加藤文雄氏提案の理由を説く、松本郡太郎

氏の開宗六百五十年記念大會當時の經過及現在將來の希望賛成意見あり、座長指名の委員附托に可決。

次で感想演説に移り、高鍋日統氏戸田聰察氏、西村喜一郎氏白井卯五郎氏、東海林光子氏津輕隨明氏、田中舍身居士の統合成立の祝意及希望を述べ、柴田氏の閉會の辭あり、池上幸操氏の發聲にて萬歳三唱、午後五時半散會す。

▲有志大懇親會▼

同日午後六時兩國福井樓に開く、來會者二百十餘名國柱會信者の大演奏ありて清新の氣新たなるを覺ゆ、八時半食堂は開かる、田中智學氏發起人を代表して挨拶を爲す、統合だんご統合サイダー統合正宗ありて、意匠頗る珍なり、席上感話には鹽出孝潤中平清治郎本郷要遠高田菊次郎島田勝存清水梁山諸氏なり、田中智學氏發起人を代表して參列者の好意を謝し、脇田僧正の發聲にて萬歳三唱し、靜肅裡に閉會を告ぐ。

▲統合大講習會▼

六月二十一日より淺草清島町統一閣に開講、各教團選士百五十名、普通聴講者百五十餘名、午後二時、佐野實孝師開會を宣す、梶木日種中村寛澄兩師の祝詞あり、野口日主師祖書を奉讀す、爾後、毎日午後二時より五時まで、五時より六時まで(交名紹介又は感想演説あり)、七時より九時まで講演、講題及講師左の如し。

- 一、教團融合論 田中智學君
- 一、統合近世史實 脇田堯淳師
- 一、基督教徒の統合運動 柴田一能師
- 一、時局と統合 高島平三郎君
- 一、教義の統合に就て 井村日威師
- 一、統合に關する意見 本多日生師
- 一、國家と宗教 山田三良君
- 一、世界政策小史 箕作元八君
- 一、日本國民の自覺 佐藤鐵太郎君
- 一、國民道德に就て 深作安文君
- 一、現代と道德 吉田靜致君
- 一、儒教と佛教 井上哲治郎君

- 一、惟神道に就て 寛彦君
 - 一、日本佛教史に就て 境野黄洋君
 - 一、日蓮主義より觀たる神學及科學 小林一郎君
 - 一、觀心本尊抄解題 清水梁山師
 - 一、五義と三法 山川智應君
 - 一、本尊の統一 嶋村日正師
 - 一、壽量品大觀 關田日城師
 - 一、本化行學の指針 松森靈運師
 - 一、日蓮本佛論 阿部日正師
 - 一、如說修行抄義II菩薩行 野口日主師
- 斯くて七月四日(講演六十五時間)滿講、森儼なる閉會の式を舉げ、聴講者には修業證書を交付せらる、各教團僧員聴講者(一般聴講者を除く)左の如し。
- 淨願寺 服部日然
 - 妙法寺 貫名見祐
 - 妙法寺 大橋玄草
 - 蓮花寺 榮井惠能
 - 北尾啓玉
 - 山梨縣甲府市伊勢町 玄妙寺 志村玄智
 - 茨城縣結城町 妙國寺 岩淵了智
 - 富山縣下新川郡魚津町 眞成寺 中村寛澄
 - 愛媛縣今治 法華寺 戸田聰察
 - 靜岡縣濱名郡和田村 妙恩寺 北原觀照
 - 山形縣南村上郡上山町 妙正寺 小野鏡雄
 - 愛知縣中島郡稻澤町 蓮照寺 森部戒然
 - 東京下谷上野町 大徳寺内大 西慈修
 - 群馬縣沼田町 妙光寺 佐藤海豊
 - 山梨縣中巨摩郡藤田村 泉鏡寺 藤井毅仁
 - 靜岡縣田方郡川西村 大仙寺 安國道要
 - 埼玉縣北足立郡南平柳村 實相寺 田村慈安
 - 愛知縣愛知郡中村 妙行寺 古橋本善
 - 茨城縣東茨城郡常盤村 本行寺 釋日雄
 - 京都紀伊郡伏見町 眞福寺 加藤是時
 - 神奈川縣三浦郡初音村 大泉寺 島田亮真
 - 同 同 西浦村 妙泉寺 中尾亮全
 - 大阪東區高津中寺町 本要寺 宮澤英心
 - 千葉縣東葛飾郡行徳 妙好寺 關觀朝
 - 神奈川縣橋本郡向丘村 本遠寺 町田鍊秀
 - 秋田縣秋田市 久成寺 山田寛恕
 - 府下豐多摩郡野方村 蓮花寺 金子慈觀
 - 工藤觀全 大島道源
 - 田村惠俊 友光學暢
 - 遠藤宜徳 柴山義隨

- 靜岡縣田方郡伊東町 妙照寺 水村遊祥
- 千葉縣行徳町 清善寺 西村慈玩
- 神奈川縣鎌倉郡腰越 本龍寺 片野玄貞
- 岡山縣邑久郡行幸村 妙興寺 岡田榮雄
- 三重縣宇治山田市一ノ木町 常明寺 大橋憲孝
- 府下荏原郡池上 常仙寺 聖智珠
- 岡山縣久米郡福渡 妙福寺 柴山日慈
- 神奈川縣高座郡綾瀬村 大法寺 横山仁秀
- 千葉縣流川町 常興寺 島田勝存
- 府下豐多摩郡澁谷村上澁谷 教會主任 高見義龍
- 滋賀縣蒲生郡馬淵 妙感寺 塚崎行親
- 山梨縣西八代郡榮村 内經寺 志村要猷
- 宮城縣仙臺市連坊小路 法蓮寺 梅森寛了
- 千葉縣夷隅郡地元村 大圓寺 小島龍成
- 青森縣弘前市新寺町 法立寺 津經隨明
- 埼玉縣北葛飾郡八木郷村 大雄寺 龜谷日了
- 千葉縣長生郡茂原 實相寺 遠藤英智
- 山形縣山形市磯崎町 玄妙寺 畑榮明
- 岡山縣赤磐郡竹枝村 蓮光寺 逸見通淡
- 秋田縣平鹿郡横手町 妙晴寺 齋藤純正
- 神奈川縣愛甲郡依智村 蓮生寺 名和慈寛
- 岡山縣御津郡建部村 龍酒寺 宮崎玄養
- 同 同 菅野 幸福寺 安國一審
- 山梨縣南巨摩郡靜川村 法向寺 秋山智照
- 栃木縣那須郡大田原 正法寺 中井本義

- 山梨縣甲府市伊勢町 玄妙寺 志村玄智
- 茨城縣結城町 妙國寺 岩淵了智
- 富山縣下新川郡魚津町 眞成寺 中村寛澄
- 愛媛縣今治 法華寺 戸田聰察
- 靜岡縣濱名郡和田村 妙恩寺 北原觀照
- 山形縣南村上郡上山町 妙正寺 小野鏡雄
- 愛知縣中島郡稻澤町 蓮照寺 森部戒然
- 東京下谷上野町 大徳寺内大 西慈修
- 群馬縣沼田町 妙光寺 佐藤海豊
- 山梨縣中巨摩郡藤田村 泉鏡寺 藤井毅仁
- 靜岡縣田方郡川西村 大仙寺 安國道要
- 埼玉縣北足立郡南平柳村 實相寺 田村慈安
- 愛知縣愛知郡中村 妙行寺 古橋本善
- 茨城縣東茨城郡常盤村 本行寺 釋日雄
- 京都紀伊郡伏見町 眞福寺 加藤是時
- 神奈川縣三浦郡初音村 大泉寺 島田亮真
- 同 同 西浦村 妙泉寺 中尾亮全
- 大阪東區高津中寺町 本要寺 宮澤英心
- 千葉縣東葛飾郡行徳 妙好寺 關觀朝
- 神奈川縣橋本郡向丘村 本遠寺 町田鍊秀
- 秋田縣秋田市 久成寺 山田寛恕
- 府下豐多摩郡野方村 蓮花寺 金子慈觀
- 工藤觀全 大島道源
- 田村惠俊 友光學暢
- 遠藤宜徳 柴山義隨

(一 統)

號五十四百二第
可認物便郵種三日四十二月二年十三治明
(行發日五十月每)行發日五十月七年四正大

▲思想の界の教書▲

◎法華經講義
本多日生師著

◎如來壽量品講演輯
本多日生師講義

◎精神の修養——思想の調整
軍事教育會發行

◎軍神加藤清正公
陸軍少將 小原正愷著

◎立正安國論略解
マスター、オゲ、アツツ柴田一鹿著

◎縮法華經並開結
刷

◎橘香集

◎勤行作法

洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵
税十六錢を以て提供す

壽量品の大意を知らざれば一代佛
教の中心を知らざるもの也佛敎の
活力眞價は壽量品にあり讀め大
に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ

内容豊富立論堂
々近代の快文字
なり

清正公の人格及宗教的信仰を知ら
んとするものは先づ本書を讀まざ
る可らず施本用に尤も適せり

第一版已に賣切れ再版出來△日蓮主
義と國家との甚深なる交渉を知らん
ずは通俗的に能く之を理解せしむ本
珍美本にして百十頁の内容あり

菊判半截携帶に尤も便
なり

日蓮上人の遺文拔萃にして研究順
序の指南あり

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして
謬りなきを要す本書は日蓮門下を
通じて齊しく奉行すべき作法を示
したる教典也

定價廿五錢
郵税金四錢

上下二卷
郵税共
金四十八錢

十部郵税共
割引十五錢に

一 部
金十錢
郵税二錢

紙製二十錢 稅四錢
布製天金四十五錢 稅六錢

一部拾錢
郵税貳錢

一部金五錢
四部金二錢
郵税二錢

販賣所 東京小石川白山前町七番地 三上義徹
〔番〇四八八二東京替振〕

大正四年八月十五日發行(毎月一箇十五日發行)

時代の要求と日蓮主義

大僧正 本多 日生

▲讀者訪問録▼

▲竹内豐子女史▲岡田本所區

長▲日蓮正宗法道會▲

自殺防止論

三上義徹

の研究上三大祕法抄綱要

日蓮主義傳道記事

統一

號六十四百二第

號月八

國民性の日蓮主義

の修養と

子爵 五島 盛光